

問題・解答 用紙番号	45
---------------	----

の解答用紙に解答しなさい。

## 国 語

〈受験学部・学科〉

3科目型 受験者 3科目型と2科目型の併願受験者

理工学部(生命科学科)、看護学部、農学部【理系統】

問題は100点満点で作成しています。

**I** 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五五点)

私たちはふつう、<sup>i</sup>自分という存在があり、<sup>ii</sup>カンキョウ世界があつて、そのなかで生きていると  
思っています。その自分とは、生まれてから今に至るまで変わらない存在だと、<sup>a</sup>漠然と思つてい  
ることでしょう。一方、自分の身の回りにはさまざまなものがあつて、それらは個々のものとして存  
在していると考えられていると思います。それはあまりにも当然なことで、疑う余地もない、と思  
われていますが、実際には果たしてどうなのでしょう。

まず、生まれてから今に至るまで変わらない存在としての自分は、本当にあるのでしょうか。身  
体は、赤ちゃんのときから少年期、青年期、壮年期と、時間とともに成長・変化していきます。老  
年期に入ると、逆に衰微していくことでしょう。のみならず、身体を構成している個々の細胞は、  
部位にもよりますが一定期間(数カ月から数年)を経て入れ替わっていくと言います。また、我々  
は、<sup>ii</sup>コキユウにおいて酸素を取り入れ、<sup>iii</sup>二酸化炭素を吐き出し、水分や食物をセツシユし、尿や便  
を排出して、自己を維持しています。そのように、自己は常に外界との交渉のなかで維持されてお  
り、いわば流動的に(動的平衡のもとに)存在しているのであつて、それ自体として存在している  
ものではありません。このように、身体は、ある変わらない存在ではないわけです。

では心に変わらない自己を求められるのでしょうか。しかし心は、**A**な形あるものとし  
て把握できるものではありません。また心はさまざまに変化してやみません。そのつとそつとの  
意識に、自己という自覚が伴われていることは事実ですが、またそのつとそつとにかけがえのな  
い自己の主体的な行為がないわけではありませんが、変わらない自己としての心を探しても、それ  
をつかむことはできないことでしょう。

こうして、変わらない存在としての自己は、なかなか見出せるものではありません。

<sup>2</sup> 仏教では無我ということを主張するのですが、ここで存在を否定される我とは、あくまでも今、見て来たところの変わらない自己についてなのであり、それは「常・一・主・宰」と定義されるものことです。常とは常住ということ、一は不変ということ。主宰の主とは、自在の意、宰とは割断の意と言われ、要は自由自在な主体として、種々に判断する主体ということではないかと思えます。ともかく、常住・不変でしかも主体であると見なされるような我は存在しないというのが、仏教の独自の主張なのでした。

もちろん、そのつどそのつどかけがえのない主体のはたらきがないわけではないでしょう。そのいのちの流れ（相続）はけっして否定されるわけではありません。しかし仏教ではその主体が、我々凡夫においては、対象的に把握されて、しかもそれを実体的存在と見なし、さらにそれに執着しているところに、我々の迷い（誤認・錯覚）と、苦しみが起きて来る原因があるというのです。

\* 西田幾多郎も、最後の論文、「場所的論理と宗教的世界観」において、このことを次のように指摘しています。

仏教に於ては、すべて人間の根本は迷にあると考えられていると思う。迷は罪惡の根源である。しかして迷ということは、我々が対象化せられた自己を自己と考えるから起るのである。迷の根源は、自己の対象論理的見方に由るのである。

自己を対象的に捉え、それに引きずりまわされることに、我々の根本的な問題があるのであり、この立場を透脱して、主体としての自己そのものに生きることを実現することこそが、いわば悟りということになるでしょう。

一方、ものは実際に存在しているのでしょうか。たとえばリングは本当にあるのでしょうか。リングは、数日もすればしなびてきて、ついには腐ってしまうでしょう。ですからリングは真にあるとは言えないものです。そのとき仮にその姿を保っているのみです。

では机はあるのでしょうか。机は、天板・側板・脚などの組み合わせにおいて存在しているわけですから、机という一つの存在（実体）があるわけではありません。この世には、そのようなものがほとんどでしょう。洋服は、糸の集成であつて、服というある一つのものがあるわけではありません。陶器は、土の微粒子の集成であり、ある一つの実体として個々の陶器があるわけではありません。

しかも今日の B な見方からすれば、すべての物質的存在は、分子、原子の集まりであり、その原子は陽子・電子などから成り、さらに素粒子から成り立っていると云います。その素粒子は、常に運動しているようで、しかも時間的に生滅しているとも言います。要は、物質の究極を尋ねて

も、変わらない存在はないということです。すべてはそれぞれ一時的に一定の形状を保っているのみだということになります。

ここを、仏教は、諸行無常と表現したのです。

ところが、我々凡夫は、ものもそれぞれ変わらない存在として有ると思ひなし、それらに執着して、それらに振り回され、苦しみを生じることになります。その際、ものがあると思うのは、言葉を通してであることがほとんどでしょう。本来、事として相続されているのみの世界に、言葉によってそれに見合うものがあると考え、変わらない実体的存在を認めてしまい、執着してしまうというのです。その執着の前提に、<sup>3</sup> 事のもの化があります。

そうすると、世界には、じつは変わらない自我もないし、変わらないものもないのが真実であるということになるでしょう。

今、X、ということを書きました。このことを、もう少し詳しく<sup>iv</sup> ブンセキしてみましょう。

我々は言語を駆使する生きものとして、生物のなかでも独自の存在であるわけですが、では我々は言葉を、何に対して適用しているのでしょうか。ふつうは、外界の存在などに対して、言葉を立てると考えられているでしょう。しかし、外界は、我々の感覚、五感をとおして、我々に知られます。我々が知っている外界は、その感覚以外にはありません。とすれば、我々は五感で感知された世界に対して、意識が言語を立て、そこにもなどを認識しているということになるでしょう。

では感覚、すなわち五感の世界とは、どのようなものなのでしょうか。五感とは、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚のことですが、仏教ではこれらを<sup>v</sup> 眼識・耳識・鼻識・舌識・身識と言っています。<sup>\*</sup> 唯識思想では、眼識はそのなかに色を浮かべてそれを見るもの、耳識はそのなかに音を浮かべてそれを聞くものなどと考えられており、感覚対象はそれぞれの感覚のなかにあるものと考えられています。

その際、まず五感それぞれ別のものであること<sup>v</sup> にリウイすべきです。我々が外界と最初に接触すると思われる五感の世界は、じつはもともと各別の世界のはずです。眼は色を、耳は音を、鼻は匂いを、舌は味を、身体は感触などを、それぞれ別々に感覚していて、五感そのものの地平では、そうしたそれぞれ別々の感覚しかありません。つまり、我々は感覚の地平では、ものをものとして知覚することはないということです。

しかも五感のおのおのは、時間の経緯にしたがつて、時に明瞭に、時に微妙に変化していると考えられます。同じ一つのものを見ていたとして、光のさし具合の変化があれば、そのことに応じて視覚の内容もまた変化しているはずです。自ら顔の向きを変えれば、そこでも視覚の内容は変化します。じつは視覚内容、さらには五感の内容は、しよつちゆう変化しているのが実情でしょう。そこに一定の、変わらない感覚の持続などはないに違いありません。まさに事の世界があるのみとい

うことです。

さらに、五感の世界には、分別はありません。眼識が、これは青い、これは黄色い、とか、これは濃い色だ、これは薄めの色だとか判断はしません。もちろん、眼識が過去の色を見ることも、未来の色を見ることもありません。現在のみ、ただその色のみを見ているだけ（むしろ見えているだけ）で、そこに分別は入りません。無分別の世界なのです。五感のおのおのが、こうした性格を有しているわけです。

そういう五感の流れが、まず我々に与えられているわけで、それらに対し、意識は言葉を用いて、それらの五感を束ね、そこにリングがある、机がある、などと認識していくのでしよう。そのように言葉以前の世界は、別々の、無分別の、五感の流れ（相続）の世界があるのみです。このように、ものも自我も、後から言葉を通して仮構されたにすぎないものなのです。ですから、そこに実体的存在（常住の本体を持つ存在）があると見なすのは、なんと虚妄な認識（まぼろし）でしかなく、じつは錯覚にほかならないのです。

（竹村牧男『はじめての大乗仏教』一部改変）

\* 西田幾多郎……日本の哲学者（一八七〇—一九四五）。

\* 唯識思想……大乗仏教の思想の一つ。

問一 二重傍線部 i ー v と同じ漢字を用いるものを、次のアーオのうちからそれぞれ選びなさい。

i カンキョウ

- ア チームの優勝にカンキする。
- イ 将来は映画カントクになりたい。
- ウ スペースシャトルが宇宙からキカンした。
- エ 血液が体内をジエンカンする。
- オ 服をカンソウ機に入れる。

ii コキョウ

- ア AIが急速にフキョウする。
- イ フィルターにごみがキョウチヤクする。
- ウ 建物のロウキョウ化が進む。
- エ 話し合いがフンキョウする。
- オ 絶体絶命のキョウチに立つ。

iii セツシユ

- ア 近所でセツトウ事件が起きる。
- イ 生活のセツケイを立てる。
- ウ 現在の気温はセツシ二十度だ。
- エ セツチユウ案を検討する。
- オ 新刊のセツチヨをお送りする。

iv ブンセキ

- ア 集めたデータをカイセキする。
- イ サインのヒツセキを確認する。
- ウ 親友の旅立ちにセキベツの涙を流す。
- エ 社会からハイセキされる。
- オ ボランティアサークルにザイセキする。

v リユウイ

- ア 自分のセンリユウが雑誌に掲載される。
- イ 退職を決めた社員をイリユウする。
- ウ キョウリユウの化石が発見される。
- エ 海底のリユウキが見られる。
- オ リユウサンを嚴重に保管する。

問一 波線部 a～c の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

a 漠然と

- ア 慌ただしい様子で
- イ 自信のない様子で
- ウ 危なっかしい様子で
- エ 誇らしげな様子で
- オ ぼんやりとした様子で

b 凡夫

ア 普通の人

イ 冷静な人

ウ 多数の人

エ 単純な人

オ 真面目な人

c 虚妄

ア ひどく程度の低いこと

イ なんの根拠もないこと

ウ 世間で一般的なこと

エ 深い意味を持つこと

オ 無理がなく道理に合ったこと

問三 空欄  ・  に当てはまる最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ

れ選びなさい。

A ア 論理的

B ア 教育的

イ 具体的

イ 芸術的

ウ 計画的

ウ 倫理的

エ 実践的

エ 理想的

オ 瞬間的

オ 科学的

問四 傍線部1「自分という存在」とあるが、これに関する説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 身体は外界との交渉を断つても自律的に存続できることから、自分という存在は独立した実体として成立している。

イ 心ははつきりと捉えることができないものの、その根底には一貫した自己が存在していることが、変わらない自我の根拠といえる。

ウ 心はそのつど自己という自覚が伴っており、変化のなかにも主体的な一貫性が見出されることで、実在する自己が認識可能となる。

エ 身体は生まれてから変わり続けるものであり、その事実を認識することが、変わらない自己としての心を捉える第一歩となる。

オ 身体は流動的な存在であって、また心も刻々と移ろうことから、不変の自己というものの存在を実際に認識することは困難である。

問五 傍線部2「仏教」とあるが、本文における「仏教」の考え方として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 仏教では、世に存在する多くのものは変化し続ける存在であるとしながらも、わずかに存在する変わらないものを「諸行無常」と表し、美徳としている。

イ 仏教では、「無我」の境地とは、変化し続ける身体や心に実体としての我を見出す考えを否定することで習得できるものだとされている。

ウ 仏教では、「常・一・主・宰」と捉えられる存在を否定し、そのような自己に執着するところこそが迷いや苦しみの根源であると説いている。

エ 仏教では、すべての現象が時間のなかで次第に変化していくという「諸行無常」の立場から、外界のものはやがて消滅する運命にあると説いている。

オ 仏教では、自己を認識することが迷いから解放される第一歩であり、主体と客体を明確に区別する視点が悟りにつながるとしている。

問六 傍線部「事のもの化」について説明した最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア ものとして実体を持つ対象を、変化の過程にある現象として捉え直すことで、それに対する執着を手放そうとする仏教的な認識をすること。
- イ 本来はただ流動的に出来事が起こり続けているだけであるのに、言葉によって固定的な存在として捉え、実体があるものと見なすこと。
- ウ 人間の内面に起こる意識や感情の動きを、外界にある物質的な作用とみなし、その原因を明らかにしようとする事。
- エ 複雑な出来事を整理するために、それらを分類・命名してもののように扱うことで、対象に対する理解を深めること。
- オ 世界に存在するすべての事象には、それぞれ本質的な意味や目的が内在しており、人はそれを見出すことによって真理に近づけるとすること。

問七 空欄  X  に入る最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 我々がものなどの存在を認めてしまうのは、言葉をとおして世界を把握するからだ
- イ 我々は変わらない自己を肯定し、理解することで、迷いや苦しみから解放される
- ウ 我々は外界との関わりをとおして世界を知り、主体的に生きることができる
- エ 我々の身体が五感によって感知している情報は、変わらない性質を持っているのだ
- オ 我々が自我や対象の存在を共有できるのは、世界を感覚的に捉えているからだ

問八 傍線部4「意識は言葉を用いて、それらの五感を束ね、そこにリングがある、机がある、などと認識していくのでしょうか」とはどういうことか。最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 対象を正確に把握するために進化した五感を用いて、外部の情報が脳内で自動的に統合されることで、現実世界にある「もの」の存在を明確に知覚できるようになるということ。

イ 五感是个別に対象の違いを判断する力を備えており、視覚や嗅覚などの情報は、現在の感覚だけでなく過去の経験や未来への予測とも結びつける働きを担っているということ。

ウ 五感の感覚がそれぞれに対象の特徴を受け取ることによつて、私たちはそれらが無意識のうちに「もの」として意味づけ、現実世界を認識するための基盤を構成していくということ。

エ 五感は本来、それぞれが独立して変化し続ける無分別な感覚の流れがあるだけだが、人間はそれらを言葉で表すことで、実体のある世界があるかのように認識していくということ。

オ 五感が捉える内容は状況によつて変化しやすいが、そこに言葉が加わることで対象に秩序と意味が与えられ、人間は複雑な世界を正しく理解して把握できるようになるということ。

## II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

科学の世界で、たいへん重要なことがまずある。それはわれわれの脳の典型的なはたらきである意識が、主観だということである。主観とはつまり、客観性が欠けるということである。だから古典的な科学、つまり十九世紀風の科学では、意識は自然科学のなかに入れてもらえなかった。そういう対象の研究は、どうぞ文学部でおやりください。だからいまでも、心理学は文学部にある。文学などは「主観的」なものだから、自然科学では扱わないという約束事があったのである。心理はその主観に属すると見なされた。

それは一面では正しいが、別な面からすると、ずいぶんおかしい。なぜなら、自然科学もまた、意識を除いてしまつたら、成り立たないからである。

それなら感情や情緒はともかくとしても、論理の部分だけなら、脳のはたらきは科学になるのではないか。実際にいまでは、論理的な作業はコンピュータにやらせることができる。論理的な作業が高級だと思っていたのは、その意味では間違いだつた。そういう作業なら、コンピュータでもできることがわかつてしまったからである。逆にいまでは、コンピュータに可能なことはなにかを考え、それをやらせながら、脳がどのようにはたらいているかを考えることまで、できるようになってきた。ほんのわずかだが、「脳を作る」ことが部分的に、少しずつ、できるようになってきたともいえる。

以前に思われていたように、論理的な作業は高級なものではない。機械でもできることなのである。そういう見方をすれば、客観的でないといわれた「主観」のほうが、解明するのがむずかしい現象になってきたのである。むずかしい問題が高級な問題であるなら、主観のほうがずっと高級であろう。

こうしてともあれ、いまでは意識が科学の対象になりつつある。古典的な自然科学、心理学のほかに、だから<sup>1</sup>認知科学などと呼ばれる分野ができてきたのである。認知科学の範囲は、実際のわれわれの脳のはたらき、あるいは計算機のはたらき、そういうものを総合的に扱うことである。こうした分野がどんどん発展をはじめたということは、古典的な意味での自然科学だけでは、もはや脳の問題は解ききれないことがわかつてきたからだともいえる。

自然科学が意識を扱わないという原則があつた時代には、たとえ脳を調べる専門家でも、脳を調べても心はわからないという結論を出すことがあつた。有名なのは神経細胞の生理学でノーベル賞を受賞したジョン・C・エックルス、あるいはカナダ生まれの脳神経外科医で、大脳皮質の機能的な地図を描いたワイルダー・ペンフィールドである。かれらは晩年になって、「脳をいくら調べても、心のはたらきはわからない」と主張したのである。もちろん若いときには、逆の考え方で研究をしていたはずである。

<sup>2</sup>なぜこういうことが起こるか、それはむずかしい問題である。しかし、この二人の著名な神経科学者が、嘘をいつているわけではない。本気でそう感じるようになったはずである。だから、脳のことをよく日常的に知っていても、脳と心は違うという結論をだすことは、あり得るのである。

この二人の場合に、重要なことは、まず第一に二人がキリスト教文化圏の人だということである。キリスト教では、もともといわゆる心身二元論を採用しやすい傾向がある。人が死ねば、身体はこの世に残るが、魂は神のもとに帰る。たとえ意識してそう教えていないとしても、文化全体としてそうした「雰囲気」を持っている。

ある年齢に達してからは、人はどうしても死後のことを思うようになる。さらにまた、古い文化のなかにおだやかに浸って、心の満足を得ようとする。日本でも、西欧文化を研究してきた人たちが、晩年に A のは、いつこうに珍しいことではなかった。

だから、自分の生きているあいだに、脳と心の問題が解けないことがわかるなら、心身二元論を採用して少しも不思議ではない。

さらにもう一つ、問題がある。それは、科学とはなにかという問題である。意識が科学を作っているとするなら、その意識自体が脳の機能であるということは、科学の普遍性に問題を生じる。このことはなかなか困難な問題を含んでいるので、機会があればあらためて考えてみたい。

それにしても、エックルスやペンフィールドのような優れた研究者たちが、そうした問題について考えなかったはずがない。そして、もし考えたとすれば、かれらの時代にこの難点を避ける最良の考え方は、脳と心を分離することだったのである。心身が二元であれば、つまり両者が本質的に別なものであれば、脳の自然科学的研究と、心の問題は分離することができる。

もちろん、ていねいに考えれば、脳と心は別だとする考えも、脳を調べれば心はわかっていくが、完全にわかるということはないという立場も、ほとんど同じだということに気づかれるであろう。

<sup>3</sup>脳と心は別だという言い方は、後者の極限を述べたともいえるからである。

こうして話は前章に述べたところに戻ってくる。すなわち科学的知識は、最終的な「真実」に到達するのか、という問いである。もちろん私はそうは思っていない。ちょうどいま地球上に存在している生物種が、同じ種のままに永遠に存続する保証はないのと同じように、いま通用している自然科学的な「事実」も永遠ではない。だからといって、いま生きている種が将来の種のもとになるかもしれないように、いま知られていると思われていることが、将来のより優れた考えのもとになるかもしれないのである。

こうして生物は進化し、考えも進化する。進化して、どこに究極的にたどり着くのか。それはわからない。そんなことを知るより前に、あなたの寿命がなくなることは保証できる。

これまで文学や哲学のなかでは、あるいは神秘主義的な宗教を主張する人たちからは、<sup>4</sup>脳と心の関係について、さまざまな疑問が出されてきた。脳の科学は、そのすべてに答えることは当然でき

ない。それでも、脳や心の理解について、どうすればわれわれの知識を進めることができるか、それについて答えることはできる。それを実証的に理解しようとするばいいのである。

もちろんそこでは、逆の問題も起こる。従来の自然科学が、たとえば意識の問題を「主観」として排除してきたことである。こんなことは、脳の科学のなかでは、もはやできないであろう。もちろん科学者であれば、私は自分の研究のなかに意識などという問題は含ませない、と個人的に決断することはできる。そうできるだけではなく、それはそれで立派な態度であろう。従来の自然科学は、むしろそういう態度をとってきた。

しかし、だれでもそうしなければならないという考え方は、もはや許されない。少なくとも、科学であれば、意識などという主観的な現象は「対象にするべきではない」という考えは、とることはできないであろう。なぜなら、科学を成り立たせているのは、われわれの意識にはかならないからである。だれも、意識のない人が、科学論文を書けるとは思わないはずである。それなら意識は科学の重大な前提であり、それを調べることは、科学の作業にならざるを得ないのである。

意識のような現象は、実証的な科学の対象にはならない。そういう考え方は、たしかに強かったと私は思う。いまでもそれが、心理学や人文科学の対象だと思つている科学者は多いはずである。もはやそれは、一種の社会的偏見というしかない。なぜならいまの科学は、社会的に統制されており、その社会のなかでの常識にそぐわない仕事は、なかなか科学上の仕事と認められないからである。多くの科学者は、単に「意識は科学の対象にしない」、そうした社会的統制に従っているだけかもしれない。

脳と心の関係を論じた最後に、この二つの関係について、私の本音を述べておこう。脳と心がつながらない。それはある意味では当然のことである。脳は百三十億の神経細胞が含まれた、大きな器官だからである。その複雑さはじつは恐るべきものであつて、単純にことばで百三十億の細胞など一言で表現して済むようなものではない。これがどれだけ面倒で複雑な存在かは、われわれ人間が、脳などかけらも持たない大腸菌一つすら、人工的に作ることができないことを考えてもわかるであろう。問題はそこなのであつて、それ以外のことではない。そこで神秘主義に逃げ込んだりするのだが、ここまで面倒なものがあるということ、そういう人は素直に見ようとしただけである。芸術は爆発だ、といった人がいたが、科学は爆発して済むものではない。きちんと、順ぐりに、手順を踏んで理解していくしかない。まことに幾何学には王道はないのである。

(養老孟司『考えるヒト』一部改変)

\* 前章に述べたところ……筆者は「自然のできごとに対する態度」として、「私たちは正しい答に無限に近づくことはできるかもしれないが、正しい答そのものを手に入れることはできない」と述べている。

問一 傍線部1「認知科学などと呼ばれる分野ができてきたのである」とあるが、この背景の説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 文学の分野における主観的な表現の評価に科学的手法を応用しようとする試みから、心理学を基盤として長い時間をかけて形成された。
- イ 主観を排除するという従来の科学に対する姿勢を強化するため、新たな手法を用いた研究が積極的に進められる過程で、「意識」の可能性が<sup>みいだ</sup>見出された。
- ウ これまでの研究ではわからなかった、脳やコンピュータのはたらきを総合的に扱う新たな分野として、「意識」を科学的に研究する必要性が生まれた。
- エ 現在の非科学的なものとされる「意識」が除外される動きのなかで、脳のはたらきに特化して研究を進めることの必要性が認識され始めた。
- オ 論理的な作業は人間にしかできない高級なものであると考えられていくなかで、それを支える「意識」の重要性にも気づくようになった。

問二 傍線部2「なぜこういうことが起こるか」とあるが、筆者が考える回答として適切なものを、次のア～カのうちから二つ選びなさい。

- ア キリスト教文化圏では、心身二元論が受け入れられやすい背景があり、研究者たち自身も年齢を重ねるにつれて死後を意識するようになるため。
- イ 脳も心も解き明かされていない謎が多くあり、脳と関連つけて心の仕組みを明らかにすることは不可能だと、研究を進めるなかで気づいたため。
- ウ 「意識」は科学の普遍性そのものを揺るがしかねない存在であることが、晩年になって研究者たちのなかで認識されるようになったため。
- エ 科学の普遍性に不都合を生じさせないようにするには、意識自体が脳の機能であることを避ける必要があり、脳と心を分離する考えは都合がよいため。
- オ 古典的な自然科学の立場では、心は科学の対象外であることを前提として、多くの研究を進めてきてしまったため。
- カ 脳と心が同じはたらきをするという考えはキリスト教の教えに反するもので、脳を調べて心を研究すること自体に無意識のうちに恐れを抱くため。

問三 空欄 A に当てはまる最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 和服を着て畳の上で、純日本の生活をする
- イ 西欧思想を批判して、宗教の在り方を見直す
- ウ 人生を振り返り、海外移住を決意する
- エ 部屋にこもり、芸術活動に没頭する
- オ 昔を懐かしみ、質素な生活を心掛ける

問四 傍線部3「脳と心は別だという言い方は、後者の極限を述べたともいえる」とあるが、その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 脳と心はまったく完全に異なる次元にあるため、脳を調べることで心の完全な理解を目指すことは困難で無意味であるということ。
- イ 脳を調べればある程度は心がわかるという立場も、結局は心を完全に理解できないという点で、脳と心は別だとする考えと変わらないということ。
- ウ 科学的な手法ばかりでは心についての本質的な研究ができないが、それは脳にも同じことがいえるため、結局心と脳は根本的に似ているということ。
- エ 脳の研究が進んでいる現在では、心の全体像が明らかになるのは時間の問題で、両者の意見は結局同じ内容に収束していくということ。
- オ 脳と心は別の対象として認識している立場の人も、初めは脳の観察を通して心の研究をするので、両者をはっきり区別する必要はないということ。

問五 傍線部4「脳と心の関係」とあるが、このことに対する筆者の考えとして最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 論理的な作業はコンピュータにも可能であるとわかったいま、心の解明も機械的処理によって行うことができるので、コンピュータの開発を早急に進めるべきだ。
- イ 脳には百三十億もの神経細胞があり、それを完全に解明することは非常に難しいので、多くの科学者が共に手を取り合って研究に励むことが求められている。
- ウ 脳と心の問題は非常に複雑で科学的解明には限界があり、科学者の多くはその困難さを避ける傾向にあるが、時には突飛なアイデアで取り組むことが重要だ。
- エ 大腸菌すら人工的に作れないほど生命は複雑であり、脳と心の関係も同様に把握が困難なため、人間の身体を完全に理解する試みは断念せざるを得ない。
- オ 脳と心が容易に結びつかないのは脳の構造が極めて複雑だからであり、その複雑さを神秘的なものにすることなく、実証的で段階的な方法で理解すべきだ。

問六 傍線部⑤「意識の問題を『主観』として排除してきた」とあるが、このことに対する筆者の考えとして適切なものを、次のア～カのうちから二つ選びなさい。

ア 主観的な意識を科学の対象にするべきではないという考えは、いまなお多くの科学者に支持されており、その姿勢こそが科学的な厳密さを保つ手段である。

イ 意識は主観的で個人差の大きい事象であるが、意識が科学にもたらす影響は明らかなので、研究対象として扱うかの議論を活発に行わなければならない。

ウ 意識が科学の成立を支えているということは前提の事項にもかかわらず、研究対象から除外することは、科学に本質的な矛盾をはらんでしまうことになる。

エ 主観的な現象を取り扱うには客観的手法だけでは限界があるため、意識の問題については従来通り心理学や人文科学に委ねるのが適切である。

オ 科学者が意識の問題を扱わないのは、主観に対する関心の薄さからくるものであり、社会的な偏見や統制とは無関係である。

カ 意識のような主観的な現象を排除するという旧来の科学の立場は、現代の科学においては通用しなくなっており、今後は積極的に扱うべき対象である。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものには a、合致しないものには b を、それぞれマークしなさい。

ア 意識が古典的な自然科学の対象から外されたのは、自然科学の枠組みにそぐわないことが科学的に証明されたからである。

イ 科学的知識は進化するものであり、現在通用している自然科学の事実も、将来的により優れた考えの基礎になる可能性がある。

ウ 脳と心の関係については、科学と文化、宗教的な価値観が複雑に関係しており、それらの影響は科学的判断にすらおよぶことがある。

エ 科学的知識は「真実」にたどり着くはずであり、現在の技術の進歩を考えれば、遠くない未来に新たな「真実」が明らかになることが期待されている。

オ 脳科学を個人として研究する場合、これまで通り意識の問題を取り扱わずに研究に取り組むという姿勢が許される。